

Title	著者リプライ
Sub Title	
Author	山腰, 修三(Yamakoshi, Shūzō)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2023
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.28 (2023. 7) ,p.121- 122
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20230701-0121

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

著者リプライ

山腰 修三

本書を津田正太郎先生に書評していただき、大変光栄に思う。学部生時代の筆者にラディカル・デモクラシーに関するエルネスト・ラクラウとジャンタル・ムフの著書を紹介してくださったのは、ほかならぬ津田先生だったからである。したがって、本書の理論的骨格の一つは当時の津田先生のご指導をきっかけに形作られたものということになる。

本書は民主主義とジャーナリズムをめぐる「危機」に対して批判的なメディア・コミュニケーション研究は何ができるのかを検討したものである。そのねらいと方法論については津田先生に的確に要約していただいたのでここで繰り返すことはせず、津田先生から提起された批判に応答していきたい。

第一点目は「政治のメディア化」概念の評価をめぐる問題である。メディア化が「メタ過程」であることをきちんと理解すべきだという点、「政治」がニュースメディアに与える影響を「メディア化」との観点から分析した研究もすでに存在する点をご指摘の通りである。

メディア化はグローバル化に代表される「メタ過程」の一つである。さらに、あらゆるものが権力関係へと転じ、抗争の対象となる「政治化」もまたその一つとなる。筆者の議論はどちらかというと、「政治」が持つ固有の論理や力学がメディアに及ぼす影響——すなわち「政治化」——を過大に評価する傾向があることは重々自覚している。他方で、「メディア化」の議論にはメディアの影響を過大に見積もる傾向があるように感じるのも事実である。例えばメディア化は「政治」を駆動させる固有の論理や力学の根幹を変容させるものと見なすことはできない。あくまでも政治的実践の表層的な影響にとどまるのではないか。

「政治のメディア化」をめぐる考察をより発展させるためには、恐らくメディア化と政治化の二つの過程の相互作用や節合形態を分析するためのさらなる理論的探究が求められる。もちろん、「メディア化」は現在最も活発に議論されているメディア理論の領域の一つであり、筆者の理解が不足している点や適切に評価できていない側面もあると思われる。ちょうど津田先生によるスティ・ヤーヴァードの『「メディア化」する文化と社会』の翻訳も出版されることもあり、理解を深めていきたい。

第二点目と第三点目は、津田先生が書評の節のタイトルとして掲げた「批判的であることの困難」をめぐるものである。この点については本書の中でとくに意識的に論じてきたつもりではあるが、確かに説明が足りなかった部分もあるので若干の補足を加えながらまとめて応答したい。メディア・コミュニケーション研究の批判的アプローチは長らく、抑圧された「声」の救済を目指し、そのための「論理」を發展させてきた。しかし近年、そうした論理が抑圧する側によって用いられる傾向が顕在化してきた。例えば自分たちこそが抑圧されていると考えるトランプ支持者たちである。そしてそうした言説が活性化しているのがSNSである。SNS上ではこれまで「批判」を展開してきたジャーナ

リズムやアカデミズムが逆に批判対象となる状況さえ生まれてきた。こうした時代診断は、津田先生と筆者は基本的に共有していると言える。

だが、それは必ずしもデジタル時代に新たに生じた困難ではない点に留意する必要がある。むしろそうした困難は、1980年代のスチュアート・ホールやラクラウが格闘していた問題と通底している。彼らが例えば労働者階級をはじめとする抑圧された者を自らの支持勢力へと転換することに成功した英国のサッチャリズムから学んだのは、「批判」の論理が抑圧された「声」の救済につながるか否かはヘゲモニー闘争の帰趨に依存するという点であり、したがって「批判」のプロジェクトがもたらす帰結は偶発性に基づく不確実なものだということである。そうした困難性を認識しつつ、批判的アプローチが新たに打ち立てたのが、ラディカル・デモクラシーのプロジェクトであった。

だとするならば、批判的アプローチの現代的課題とは、ラディカル・デモクラシーのプロジェクトが直面する困難を分析し、新たな批判のプロジェクトを立ち上げることとなる。この点において、筆者は津田先生ほど悲観的ではない。とはいえ、楽観もしていない。1980年代に批判的アプローチに取り組んだ再生のプロジェクトとは大きく異なる条件が存在するからである。それは、立場の異なる者同士が共通のルールで競い合う「闘技」のフィールドそのものが衰退している点である。そしてその典型がマス・メディアによって担われたジャーナリズムの危機だと言える。しかしこうした事態はただ困難をもたらすだけでなく、可能性に対しても開かれている。デジタルメディア環境において、いかに「闘技」のフィールドと規範を再制度化するのが求められており、ジャーナリズムの再生の道も基本的にはこの方向性で検討されるべきであると考えている。

ただし、批判的メディア・コミュニケーション研究とジャーナリズムの再生の道は本書では示唆の段階にとどまった。これらの点について、理論的探究を進めることが筆者の今後の課題である。その際には、本書が大きく依拠したラディカル・デモクラシーをはじめとするポスト構造主義的な政治理論にとどまらず、「声」や「聴くこと」に関する熟議民主主義などのコミュニケーションをめぐる規範概念も参照しながら検討しなければならないと考えている。そうした作業を通じて提示する新たな研究成果が、筆者にラディカル・デモクラシーを紹介してくださった津田先生による今回のコメントへのより深い応答となれば幸いである。

(やまこし しゅうぞう 慶應義塾大学)